

2. 犯罪被害者遺族のサポート・グループの有効性の検証と運営上の留意点の提示

○佐々木 健太（公益社団法人みやぎ被害者支援センター）
小林 大介（新潟青陵大学）

【研究目的】

本研究は、犯罪被害者遺族のサポート・グループ（以下、SG）の参加者へのインタビューを通じて、SGに参加する遺族の変容プロセスを明らかにし、遺族のSGの効果およびSGを運営する際の留意点について検討を加えることを目的とする。さらにその知見を支援者間で共有することで犯罪被害者支援に役立てる。

【研究の必要性】

最新のデータによると、令和元年の殺人などの一般刑法犯罪による死亡者数は700人、交通事故による死亡者数は3215人であった（法務省、2020）。犯罪被害による死亡者数は年間3915人となり、遺族は数万人に上り、それは毎年積み上がるためその総数は数十万人にもおよぶ。犯罪被害による死別は通常の死別に比べ強い精神的衝動をもたらすため、PTSDと複雑性悲嘆の有病率が高いとされる（中島ら、2009b）。遺族の支援においては、心理教育、グリーフ・カウンセリングやグループによる支援などが有用とされる（白井、2008b）。本研究では、その中でも実践は多数行われている一方、詳細な検討はあまりされていないSGに着目する。本稿ではSGについて、「専門家あるいは当事者以外の人びとによって開設・維持される、参加者の自主性・自発性が重視される相互援助グループ」（高松、2009）という定義を用い、同趣旨のグループをSGと呼ぶこととする。遺族のSGについての先行研究は総論的に論じているものは少なからずあるが、調査研究はとても少ない。また、精神疾患の予防となる質の高い心理的援助を考慮する上で、遺族の心的変容プロセスを理解することは重要であるが、SGに参加する遺族の体験をもとにした心的変容プロセスを詳細に検討したものは見られない。喪失による影響は心理面にとどまらず、身体面や行動面、社会生活にも及ぶが、その変容プロセスの検討もSGに参加する遺族に対してはなされていない。これより本研究は、SGに参加する遺族の変容プロセスを明らかにし、遺族のSGの効果およびSGを運営する際の留意点について考察することを目的とする。そしてその知見は支援者間で共有し活用できるため研究の必要性は大きいと考えられる。

【研究計画】

年月	研究計画	方法
2020年9月	先行研究の書籍、論文を収集	大学の図書館等にて収集
11月	インタビュー（月に5名、計10名）、逐語録作成	
2021年1月	データの分析	グラウンテッド・セオリー・ア

3月	質的研究者による検討	ブローチ（以下、GTA）を用いて分析【質的研究者：鹿児島大学吉村隆之准教授、臨床心理士瀧本伸一氏】
4月	分析結果をもとに考察，グループの専門家による検討	
6月	日本心理臨床学会誌に論文投稿，研究報告書の作成	
8月	研究報告書の提出	

【実施内容・結果】

1. 方法

(1) 対象者と手続き

調査対象者は，中島ら（2009b）の適格基準を参考に，被害から3年以上経過し，支援センターが運営するSGに参加している18歳以上の遺族14名（女性10名，男性4名）とした（表1）。調査期間は2020年9月～12月であり，6県の支援センターとその相談員からの紹介を通して，筆者から個別に調査を依頼した。調査方法は質問紙調査と一人当たり約120分～180分の半構造化面接で，支援センター，対象者の自宅，公共施設の会議室など対象者が安心して話せる場所で実施した。

表1 対象者のプロフィール

対象者	性別	年代	職業	被害内容	経過年数	故人との関係	IES-R	ICG	SG参加後の年数	SGの構成
A	男性	60	会社員	殺人	17年	子ども	29	28	13年	殺人・交通事故
B	女性	40	主婦	殺人	15年	兄弟	29	40	14年	殺人・交通事故
C	女性	60	パート	殺人	19年	子ども	13	17	16年	殺人・交通事故
D	女性	60	調理師	殺人	16年	子ども	39	52	16年	殺人・交通事故
E	女性	60	無職	交通事故	19年	子ども	20	43	9年	交通事故
F	女性	30	会社員	殺人	4年	配偶者	54	42	4年	殺人・交通事故
G	女性	60	無職	殺人	9年	子ども	41	42	8年	殺人・交通事故
H	男性	60	自営業	交通事故	13年	配偶者	24	34	12年	交通事故
I	女性	60	支援職	交通事故	21年	子ども	9	24	13年	交通事故
J	女性	50	パート	交通事故	13年	子ども	49	65	13年	交通事故
K	女性	50	教諭	交通事故	14年	子ども	43	50	14年	交通事故
L	女性	60	自営業	交通事故	19年	配偶者	55	61	14年	交通事故
M	男性	50	自営業	交通事故	18年	子ども	15	22	13年	交通事故
N	男性	50	自営業	交通事故	17年	子ども	26	55	17年	殺人・交通事故

(2) 面接内容と調査内容

事件・事故発生当初を「被害当初」，SGに参加した時期を「参加当初」，SGに慣れた時期を「慣れた頃」，「現在」の4領域に分類した。インタビューは，各期における心身の状態，SGのよかった点・よくなかった点，SGが生活に及ぼした影響，SGに期待すること等を尋ねた。また精神的健康状態を把握するために質問紙調査を実施した。質問紙は①フェイスシート，PTSDの評価尺度の②改訂出来事インパクト尺度：Impact of Event Scale-Revised（以下IES-R）（Asukai et al., 2002），③複雑性悲嘆質問票（Inventory of Complicated Grief）（以下ICG）（中島ら，2009a），で構成された。

(3) 倫理的配慮

本調査は，筆者が所属する組織の所属長および東北大学大学院の倫理審査委員会の承認を受け実施した。対象者に対し，本研究の目的，匿名性と守秘義務，研究への拒否権などについて説明し，書面にて同意を得た。インタビュー後に気持ちが動揺した場合は，被害者支援を長年経験した臨床心理士が対応する旨を伝えた。

(4) 分析方法

本研究では、質的分析手法の一つであるグラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、GTA）を採用し、分析の手続きが明確に示されている岩壁（2010）を参考に分析を行った。

2. 結果

分析の結果、152の下位カテゴリ、69の中位カテゴリ、26の上位カテゴリ、14の最上位カテゴリが生成された。モデル図を図1に示した。【 】は最上位カテゴリ、《 》は上位カテゴリ、〈 〉は中位カテゴリ、[]は下位カテゴリを示す。

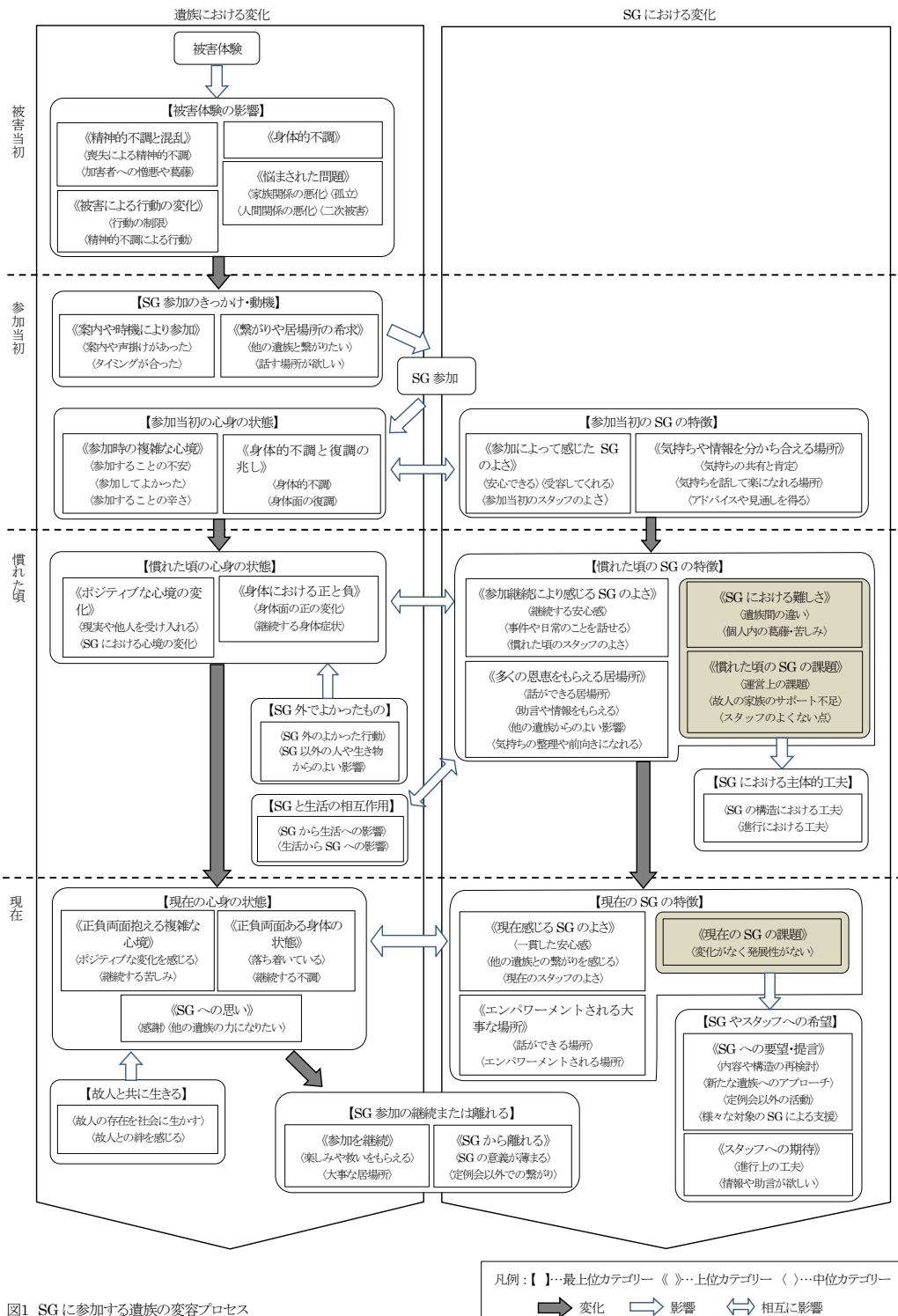


図1 SGに参加する遺族の変容プロセス

凡例：【 】…最上位カテゴリ 《 》…上位カテゴリ 〈 〉…中位カテゴリ
 → 変化 ⇨ 影響 ⇄ 相互に影響

【考察と今後の課題】

1. SGに参加する遺族の変容プロセスにおける重要な点

(1) 心身のポジティブな変化と継続する苦しみ

遺族の心身においてポジティブな変化が見られ、これらの心身のプロセスは回復のプロセスとも言えるが、一方で、被害当初から見られた心身の不調や苦しみは現在も継続しており、これは IES-R や ICG の結果とも合致する。14 人中 9 人が PTSD 症状のカットオフ値である 25 点以上を、11 人が複雑性悲嘆のカットオフ値である 26 点以上を示し、トラウマや複雑性悲嘆という大きな苦しみを抱えながら生きていることがわかる。

(2) SG 外から心身への影響

SG 以外の【SG 外でよかったもの】や【故人と共に生きる】が遺族の心身に影響を与えていた。【SG 外でよかったもの】は幅が広く、様々な行動や存在からポジティブな影響が示唆された。【故人と共に生きる】は先行研究同様（太田ら，2018），遺族が故人と共に生きていく営みを示し、遺族は心の中で故人との絆を保つという「継続する絆仮説」（Klass et al., 1996）を支持する結果であった。

(3) 遺族間の絆を育むプロセス

遺族は他の遺族との絆を求め、SG 参加により〈安心感〉や〈受容してくれる〉という遺族間の絆が生まれた。そして〈他の遺族からのよい影響〉などによりその絆は強化され、〈他の遺族との繋がりを感じる〉様子が見られた。さらに SG の参加を継続する場合も、離れる場合も遺族間の絆の継続が見られた。このようなプロセスを経て築かれた遺族間の絆は、強固かつしなやかで、SG という枠がなくても揺るぎないものと考えられる。

2. 遺族の SG の効果

(1) 安心できる場所としての機能

SG 参加後の 3 領域において、遺族を感じる SG のよさとして共通しているのは〈安心感〉であり、各時期に見られたのは、参加当初は〈受容してくれる〉、慣れた頃は〈事件や日常のことが話せる〉、現在は〈他の遺族との繋がりを感じる〉であった。このことから、SG は遺族にとって一貫して安心できる場所として機能しており、その SG への安心感を土台にしながさらさまに様々な SG のよさを感じていったと考えられる。

(2) 回復のモデルや見通しと希望を得る

SG 参加後の 3 領域において、《気持ちや情報を分かち合える居場所》、《多くの恩恵をもたらされる居場所》、《エンパワーメントされる大事な場所》という三つの SG の役割が示されたが、この役割の中位カテゴリーには「話ができる場所」という意味合いのものが一貫してあった。この「話ができる場所」には、話を聴く遺族にとっては「今後自分がどのように回復していくのかというモデルや見通しを得ることができる」（佐々木・遠藤，2020），という効果がありそれは希望を持てるという効果（大久保，2001）に繋がると考えられる。

(3) エンパワーメント

遺族の変容プロセスと、[前向きになれる] や [励みになる] などの幾つかのカテゴリー

から，SGによって遺族がエンパワーメントされる効果が示された。

3. SGを運営する際の留意点

【SG やスタッフへの希望】として示された提言は，遺族のSGにおける経験を基になされた建設的な提案であり，可能な限りSGの運営に生かすのが望ましいであろう。例えば「アンケートを取る」や「新たな遺族への積極的な広報」などは今後より力を入れるべき方策だと思われる。また上記のプロセスより示唆される運営上の留意点は，各SGの特徴やそのSGに参加する遺族のニーズによって柔軟に運営方法を変える，である。

【参考文献】（主要なもの）

- Asukai, N., Kato, H., Kawamura, N., Kim, Y., Yamamoto, K., Kishimoto, J., Miyake, Y., Nishizono-Maher, A. (2002). Reliability and validity of the Japanese-language version of the Impact of Event Scale-Revised (IES-R-J): Four studies on different traumatic events. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, 190(3), 175-182.
- 法務省法務総合研究所（編）（2019）. 令和2年度版犯罪白書. 昭和情報プロセス.
- 中島聡美・伊藤正哉・石丸径一郎・白井明美・伊藤大輔・小西聖子・金吉晴（2009a）, 遷延性悲嘆障害の実態と危険因子に関する研究——罪責感の与える影響およびソーシャルサポートの役割を中心に, 明治安田こころの健康財団研究助成論文集, 45, 119-126.
- 中島聡美・白井明美・真木佐知子・石井良子・永岑光恵・辰野文理・小西聖子（2009b）. 犯罪被害者遺族の精神健康とその回復に関連する因子の検討. 精神経誌, 111(4), 423-429.
- 佐々木健太・遠藤和子（2020）. フィールド便り：公益社団法人みやぎ被害者支援センター. トラウマティック・ストレス, 18(1), 80-82.
- 高松里（2009）. サポート・グループとは何か？高松里（編）. サポート・グループの実践と展開. 金剛出版, pp15-30.

【経費使途明細】

使 途	金 額
調査協力者謝金（10,000円×14人）※	140,000円
質的研究の助言者への謝金（10,000円×2人）	20,000円
論文検討を受けるSGの専門家への謝金（10,000円×1人）	10,000円
資料費（先行文献の書籍・雑誌購入費）（28冊）	96,775円
交通費（インタビュー場所，論文検討会場への移動に係る費用）	68,140円
会場費（インタビュー場所，論文検討の会場に係る費用）	5240円
合 計	335,155円
大同生命厚生事業団助成金	300,000円